

第7章 入学から現在までの意識・行動

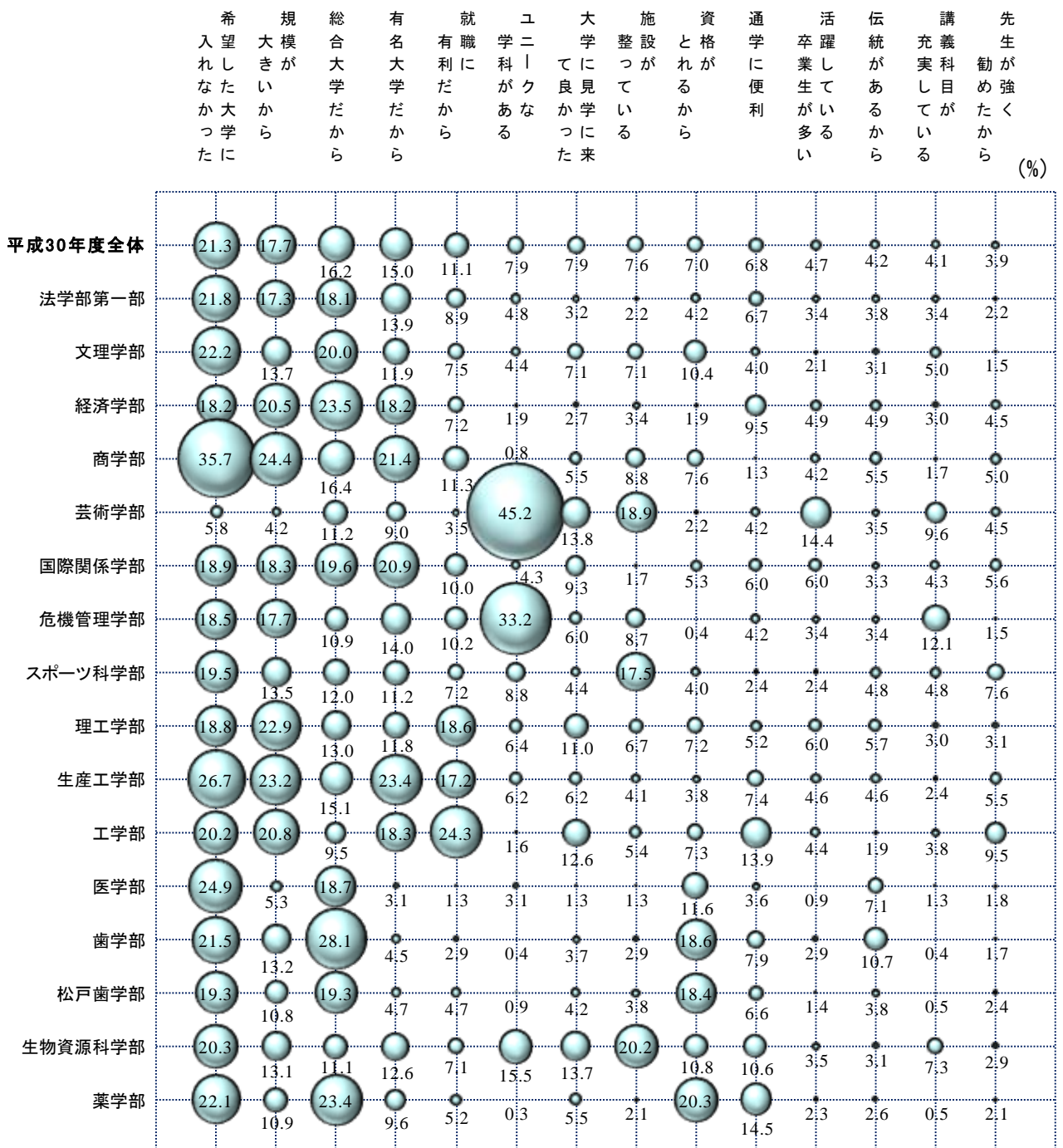
1. 入学決心理由

16学部87学科などを擁する国内有数の総合大学であることや知名度が入学理由の上位。
芸術学部・危機管理学部は「ユニークな学科があるから」が断トツ。

本学に入学する決心をした主な理由を、平成30年度全体での高い順に並べたものが下図です。本学学生全体では、「希望した大学に入れなかったから」と消極的な理由が21.3%で最も高くなっています。次いで「規模が大きいから」(17.7%)、「総合大学だから」(16.2%)、「有名大学だから」(15.0%)と国内最大級の総合大学であることや知名度が入学決心理由の上位に挙げられています。

学部別に見ると、芸術学部と危機管理学部で「ユニークな学科があるから」(各45.2%と33.2%)、商学部で「希望した大学に入れなかった」(35.7%)、歯学部・経済学部・薬学部で「総合大学だから」(23.4%~28.1%)、工学部で「就職に有利だから」(24.3%)がトップとなっています。

図7-1 入学決心理由(平成30年度全体・学部別)



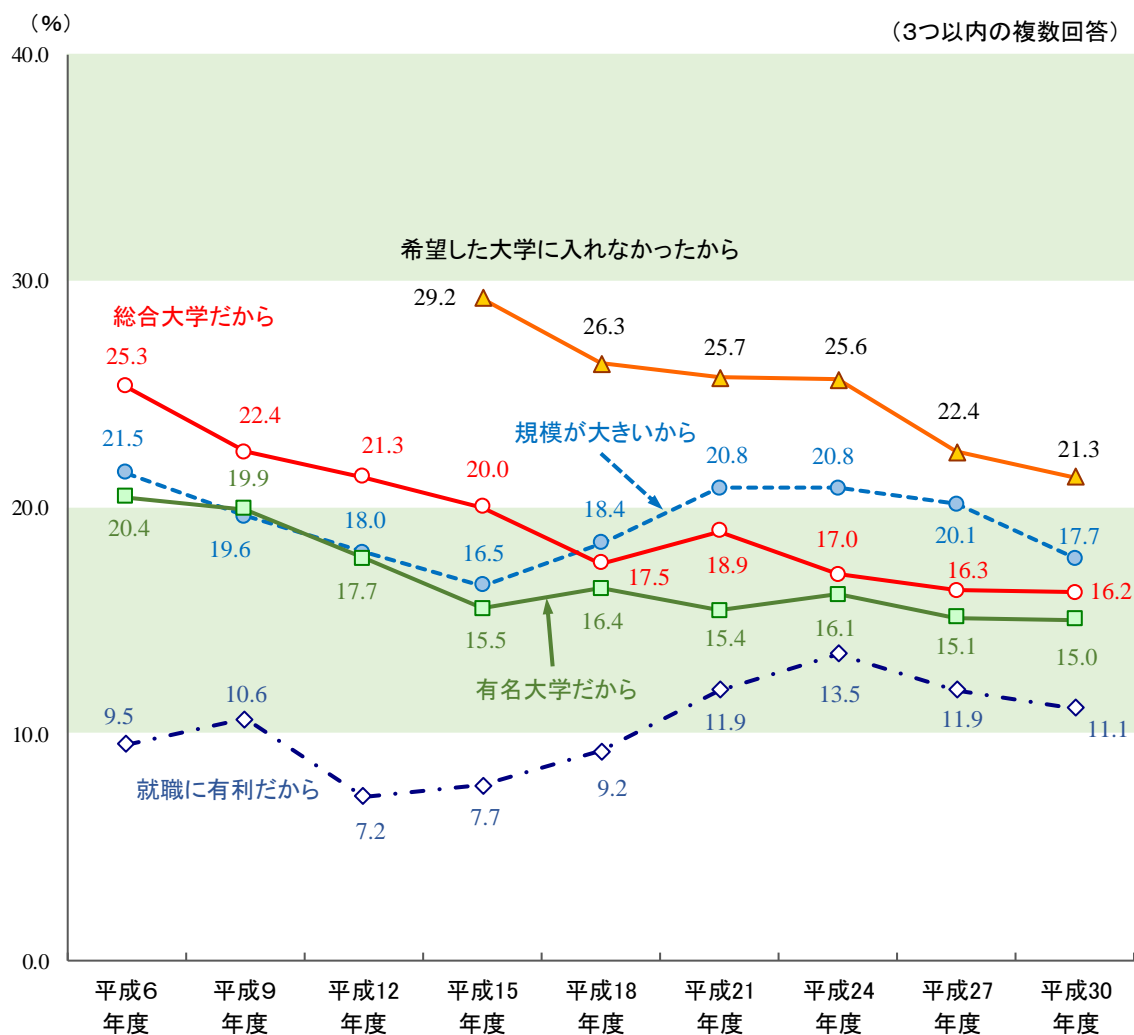
2. 入学決心理由—今回上位5項目の経年変化

「希望した大学に入れなかったから」入学した学生は、年々減少傾向
学部の魅力アップと入試制度の多様化を反映？

本学に入学する決心をした理由のうち上位5項目までの経年変化を見ると、「希望した大学に入れなかったから」は選択肢に含まれた平成15年度の29.2%から漸減傾向にあり15年間で7.9ポイント減少しています。法学部第一部・経済学部・文理学部・生物資源科学部では15年間で10ポイント以上減少しています。この傾向は各学部の魅力が強まったことに加えて、推薦・AO入試枠を増やすなど本学の入試制度の多様化に関係しているかもしれません。

「総合大学だから」は平成6年度は25.3%と入学決心理由のトップでしたが、漸減傾向にあり、24年間で9.1ポイント減少しています。「就職に有利だから」は平成12年度の7.2%から平成24年度の13.5%まで増加傾向を示していましたが、平成27年度以降減少に転じの6年間では2.4ポイント減少しています。

図7-2 入学決心理由(平成30年度上位5項目の経年変化・全体)

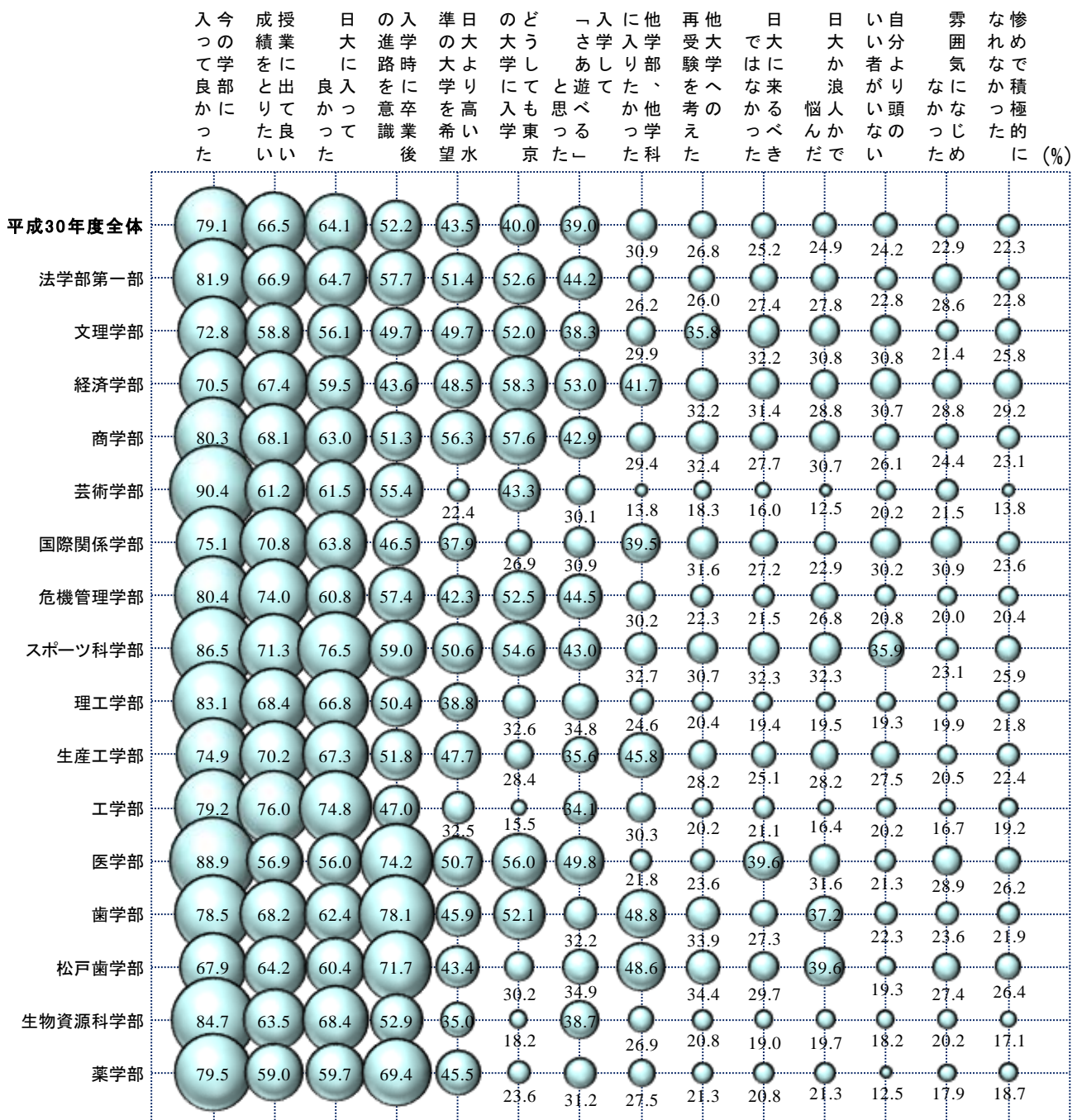


3.入学直後の意識・行動

入学直後、今の学部に入学したことに満足していた学生は8割、本学に対しては6割強。
一方で日大入学が不本意だった学生も4人に一人ほど。

入学直後の意識・行動について、本学学生が同意した比率の高い順に並べたものが下図です。平成30年度全体を見ると、「今の学部に入って良かった」が79.1%、「日大に入って良かった」が64.1%と高くなっており、本学入学に関して満足している学生が多数を占めていることがわかります。「(できるだけ多くの)授業に出て良い成績をとろうと思った」と積極的な勉学意識を抱いた学生が66.5%と2番目に高くなっています。その一方で、「他大学への再受験を考えた」「日本大学に来るべきではなかった」など入学を不本意に思っていた学生も25%強づついます。芸術学部・医学部・スポーツ科学部では「今の学部に入って良かった」が90%前後と入学直後の満足感が高くなっています。また、医歯系学部では「入学時に卒業後の進路・就職をすでに意識していた」学生が70%台と高い点が目立っています。

図7-3 入学直後の意識・行動(平成30年度全体・学部別)



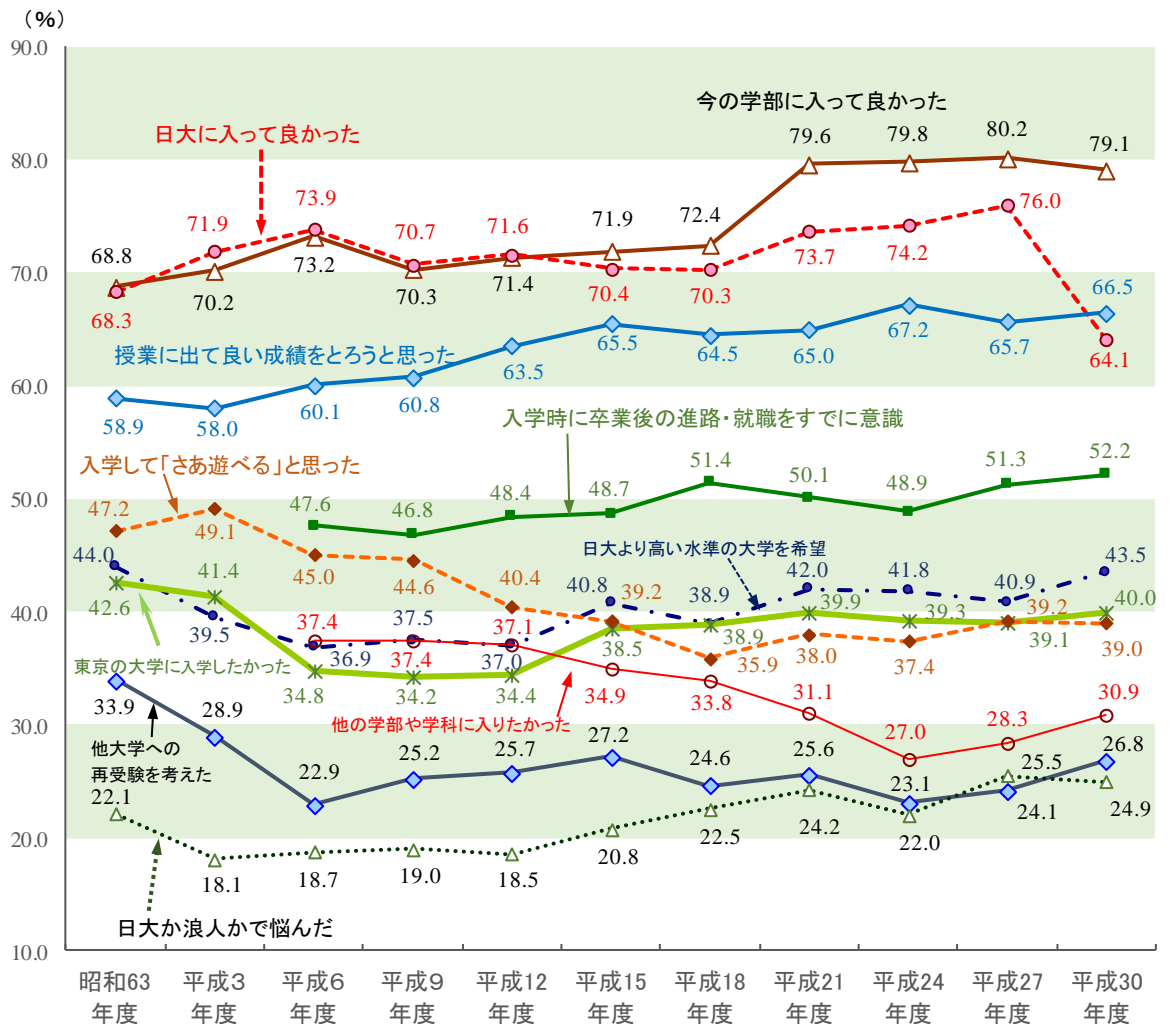
4.入学直後の意識・行動—主なものの経年変化

入学直後の勉学や目的に対する意欲は高まる傾向が続く。
一方、「日大に入学して良かった」が3年前より大幅ダウン。

入学直後の意識・行動について昭和63年度（30年前）からの経年変化を見ると、「今の学部に入って良かった」が68.8%から79.1%と10.3ポイント増、「できるだけ多くの授業に出て良い成績をとろうと思った」は平成15年度以降約65%のレベルで推移、さらに、「入学時に卒業後の進路・就職をすでに意識していた」は平成18年度以降50%前後で推移し、直近の6年間では3.3ポイント増となっています。入学直後の勉学や目的意識は向上する傾向が表れています。一方、本学入学に対する満足感（「日大に入って良かった」）は、昭和63年度の68.3%から平成27年度の76.0%と、27年間で7.7ポイント増加していましたが、平成30年度は64.1%と大幅に減少しています（11.9ポイント減）。本調査の実施は毎回6月となっていますので、4月入学の直後から6月の間に本学に対する意識が変化した学生が少なからずいたことが推測できます。

消極的な意識・行動について見ると、「他大学への再受験を考えた」は平成18年度以降25%前後で横這いですが、直近の6年間では3.7ポイント増加しています。また、「日大か浪人かで悩んだ」は平成12年度以降概ね漸増傾向となっており18年間で6.4ポイント増加しています。

図7-4 入学直後の意識・行動—主なものの経年変化(全体)



5.現在の意識・行動(上位10項目)

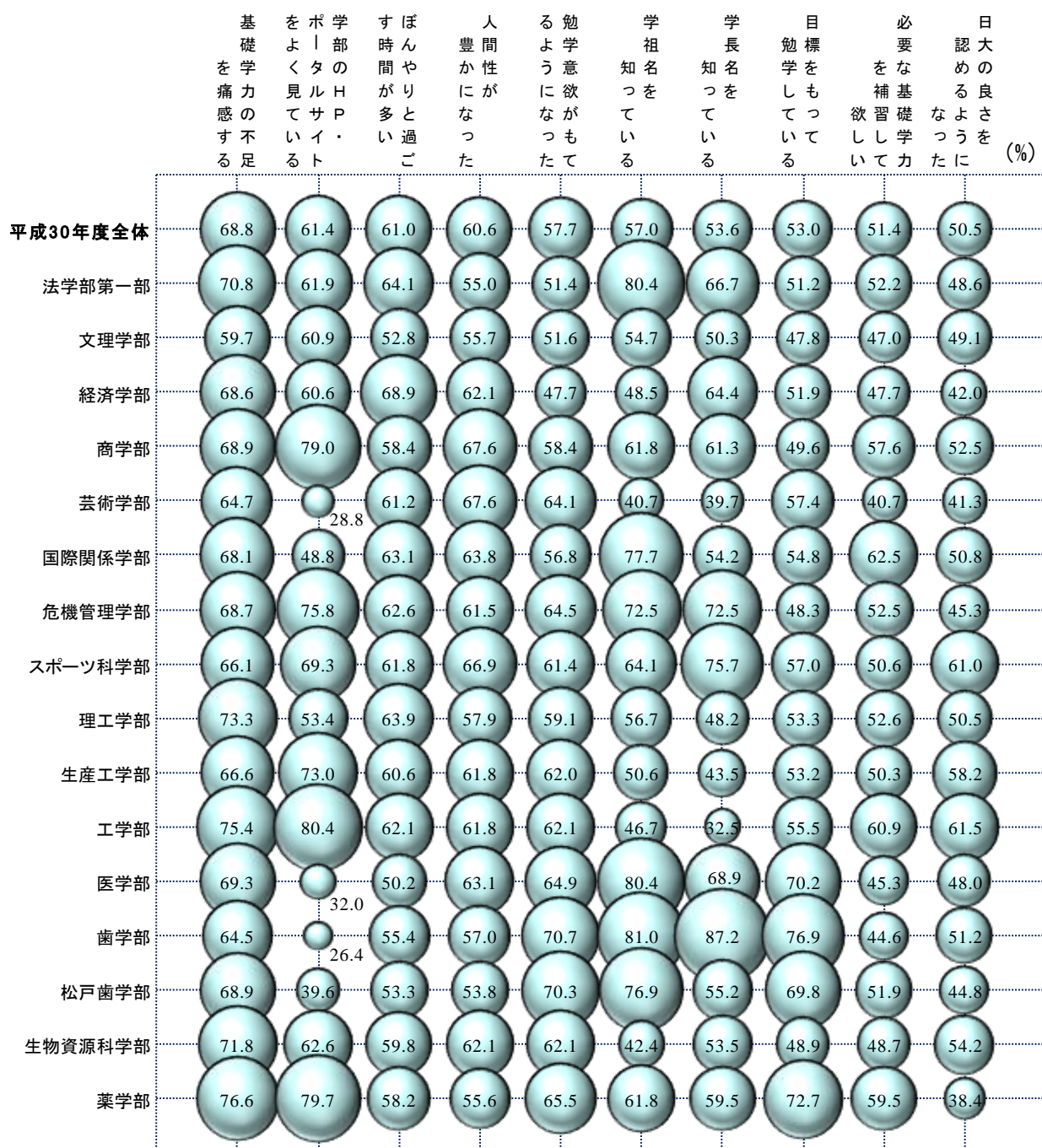
「基礎学力の不足を痛感」している学生が68.8%。

「人間性が豊かになった」「勉強意欲がもてるようになった」など積極的意識・態度が各過半数。

学生の現在の意識・行動について全体で高い順に上位10項目をピックアップしたものが下図です。

平成30年度全体では「基礎学力の不足を痛感する」が68.8%でトップとなっています。「人間性が豊かになった」(60.6%)、「勉強意欲がもてるようになった」(57.7%)、「目標をもって勉強している」(53.0%)と積極的な意識や態度を示す学生がそれぞれ過半数となっています。「基礎学力の不足を痛感する」学生は、薬学部・工学部・理工学部・生物資源科学部・法学部第一部で70%以上と高くなっています。一方、「学部のホームページ・ポータルサイトをよく見ている」「学祖名を知っている」「学長名を知っている」は学部によるバラつきが大きくなっています。

図7-5-1 現在の意識・行動-上位10項目(平成30年度全体・学部別)



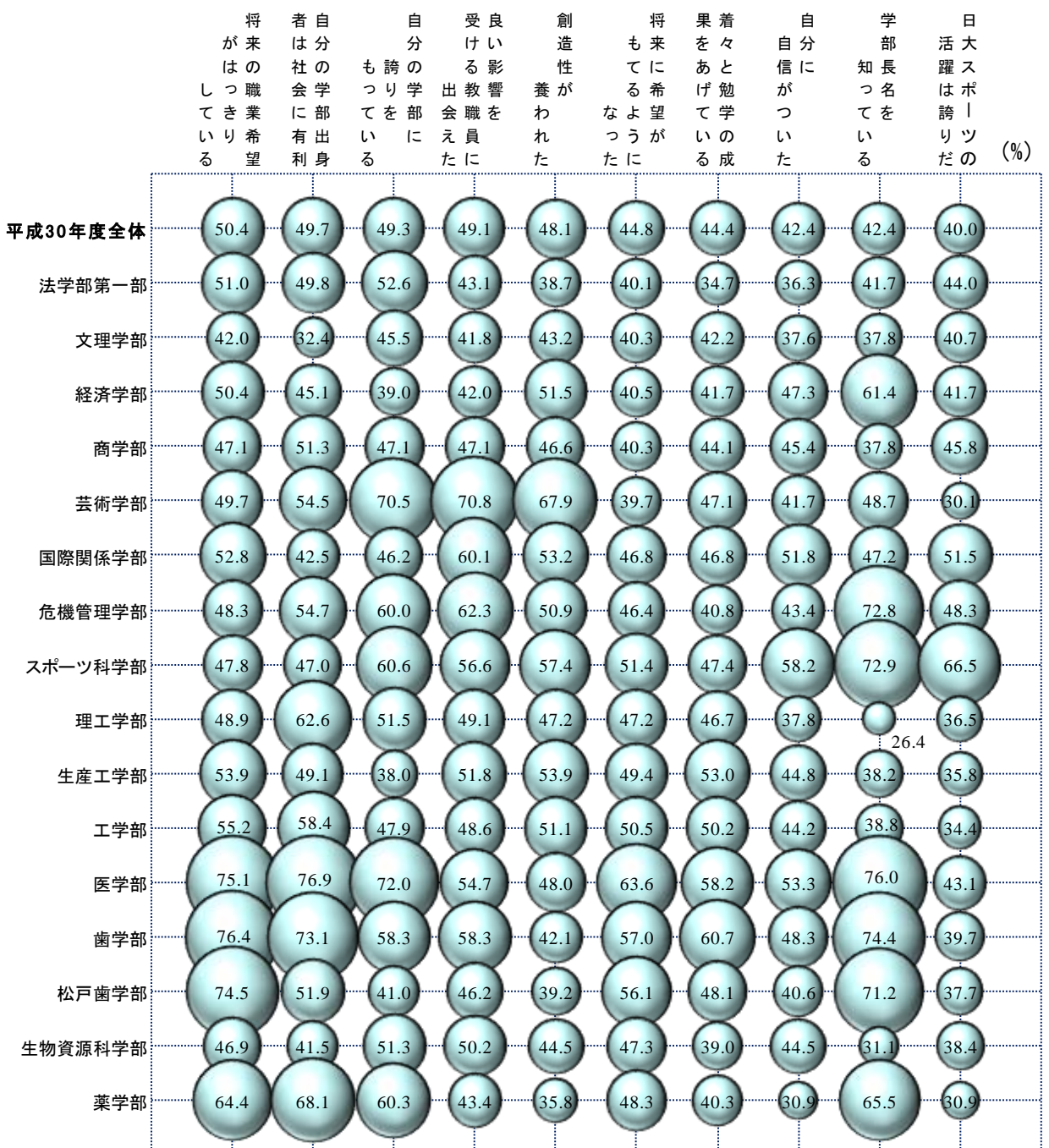
5.現在の意識・行動(中位10項目)

「職業希望がはっきり」「学部長名を知っている」は医歯系学部、
学部帰属意識は医歯薬系学部と芸術学部で高い。

学生の現在の意識・行動について上位11～20位までを表示したものが下図です。

「将来の職業希望がはっきりしている」が全体で50.4%，医師系学部では75%前後と高くなっています。自分の学部に対して「出身者は社会に出てから有利」「誇りをもっている」といった学部帰属意識は各50%弱ですが，この意識は医学部・歯学部・薬学部・芸術学部で高くなっています。「学部長の名前を知っている」学生は，理工学部の26.4%から医学部の76.0%まで学部間のバラつきが非常に大きくなっています。また，「着々と勉学の成果を上げている」という学生は，法学部第一部の34.7%から歯学部の60.7%まで学部間で差が見られます。

図7-5-2 現在の意識・行動-中位10項目(平成30年度全体・学部別)



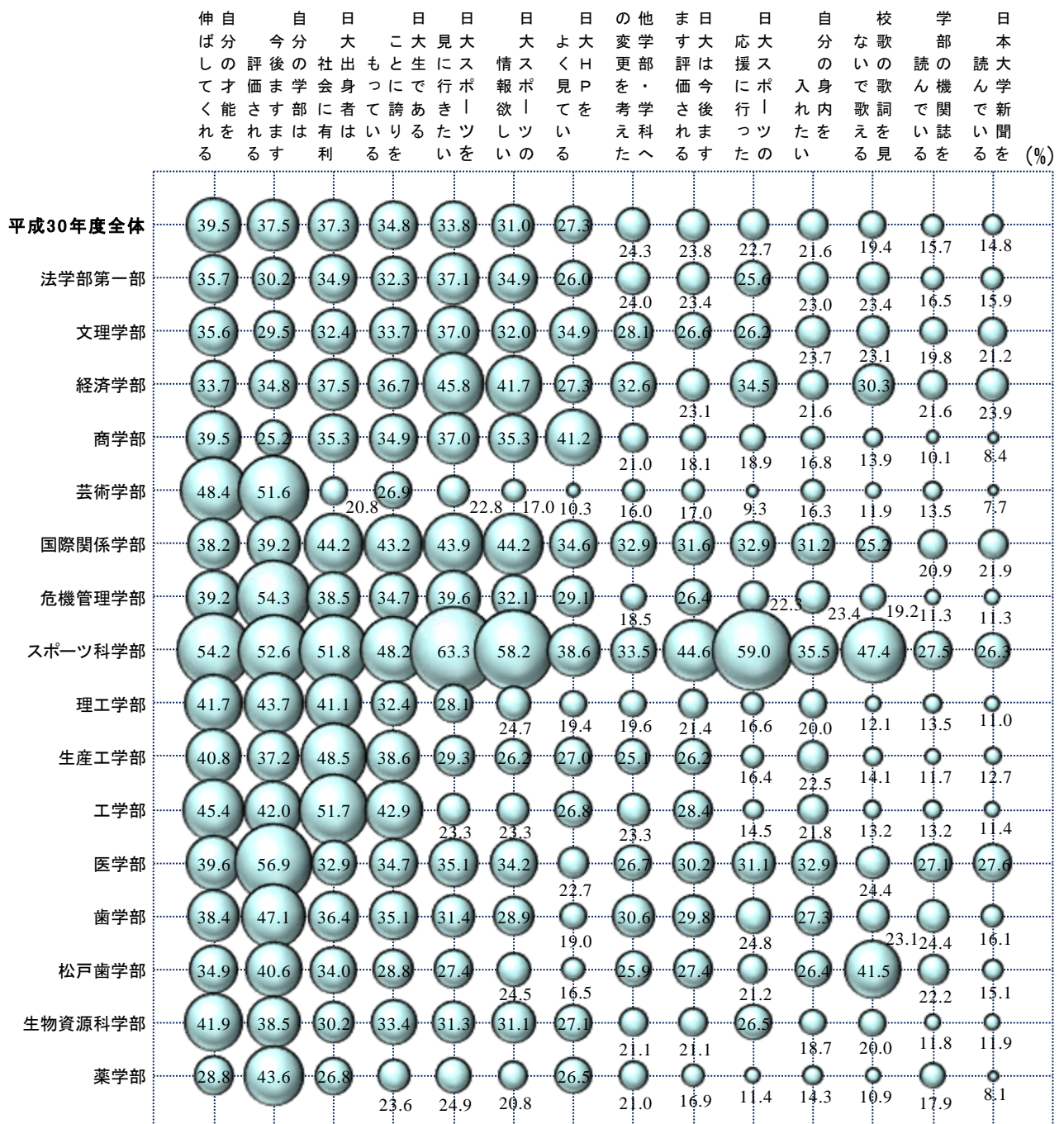
5.現在の意識・行動(下位13項目)

入学後「日大生であることを誇りに思っている」学生は34.8%。
 スポーツ科学部では、スポーツに対する意識・行動が高く、日大生としてのプライドが高い。

学生の現在の意識・行動について21～33位までを表示したものが下図です。

「日大生であることを誇りに思っている」学生は平成30年度全体で34.8%、薬学部の23.6%からスポーツ科学部の48.2%までバラつきが見られるものの全般的に低い評価となっています。スポーツ科学部では、日大スポーツに関する「日大スポーツの活躍は誇り」(全体で40.0%；前ページ)、「見に行きたい」(全体で33.8%)、「情報が欲しい」(同31.0%)、「応援に行った」(同22.7%)といった意識・行動が16学部中最も高く(各60%前後)、日大生としての誇りを強く持っている様子が見えられます。

図7-5-3 現在の意識・行動-下位13項目(平成30年度全体・学部別)

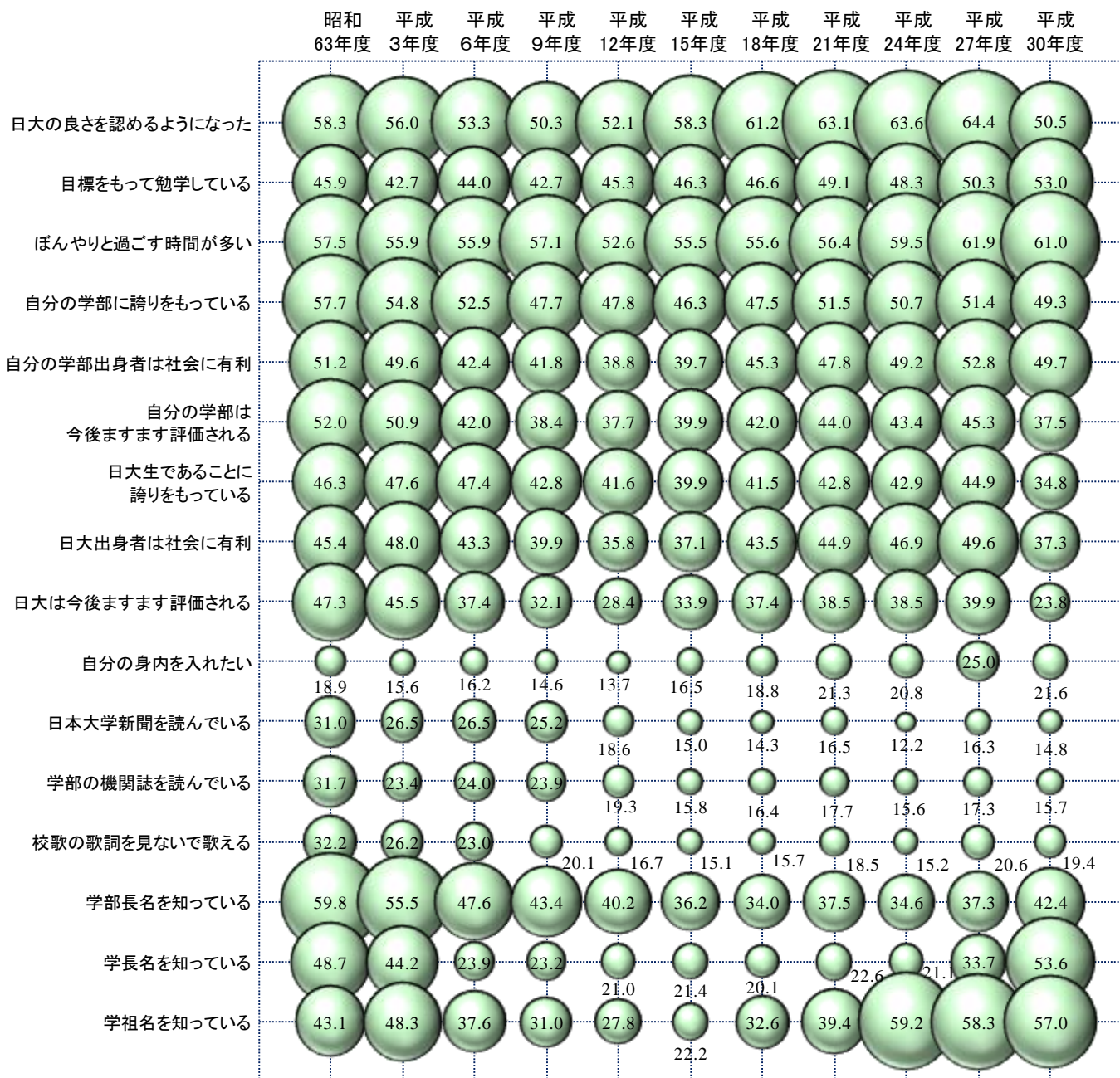


6.現在の意識・行動の経年変化

「目標をもって勉学」する学生は21年前から増加傾向。
日大に対するプライド・帰属意識は過去最低レベル。一方で「学長名」認知率は過去最高。

第1回調査（昭和63年）から継続している調査項目について、現在の意識・行動の経年変化を見ると、「目標をもって勉学している」学生が、平成9年度の42.7%から概ね年々増加し、21年間で10.3ポイント増加しています。「日大の良さを認めるようになった」は平成9年度から平成27年度の18年間で14.1ポイント増加していましたが、本年度は50.5%と平成9年の水準に戻っています。同様に、「日大生であることに誇りをもっている」は平成15年度から、「日大は今後ますます評価される」は平成12年度から各平成27年度まで増加傾向にありましたが、本年度はそれぞれ過去最低となっています。一方、「学長名」の認知率は53.6%で過去最高でした。

図7-6 現在の意識・行動の経年変化(全体)



7.現在の意識・行動の経年変化－3年前との比較

3年前と比較して、学長名の認知率と日大に対する誇り・プライド面が著しい変化。
文理学部では、加えて「将来の希望」「自信」「対教員意識」にも影響。

現在の意識・行動についての回答率を3年前と比較したものが下表です。

直近の3年間で大きく増加したのは「学長（総長）名を知っている」で、直近の3年間に19.9ポイントと大きく増加しています。これは、平成25年4月に総長制から学長制に移行したこと、本学及び学部のホームページ閲覧の浸透、マスコミへの露出などによるものと推測されます。この増加は、学生に対して学部内ポータルサイトを使って授業情報などの情報を伝達するシステムが急速に浸透していることを反映しているものと思われます。14学部で5ポイント以上、経済学部で35.4ポイントも増加しています。

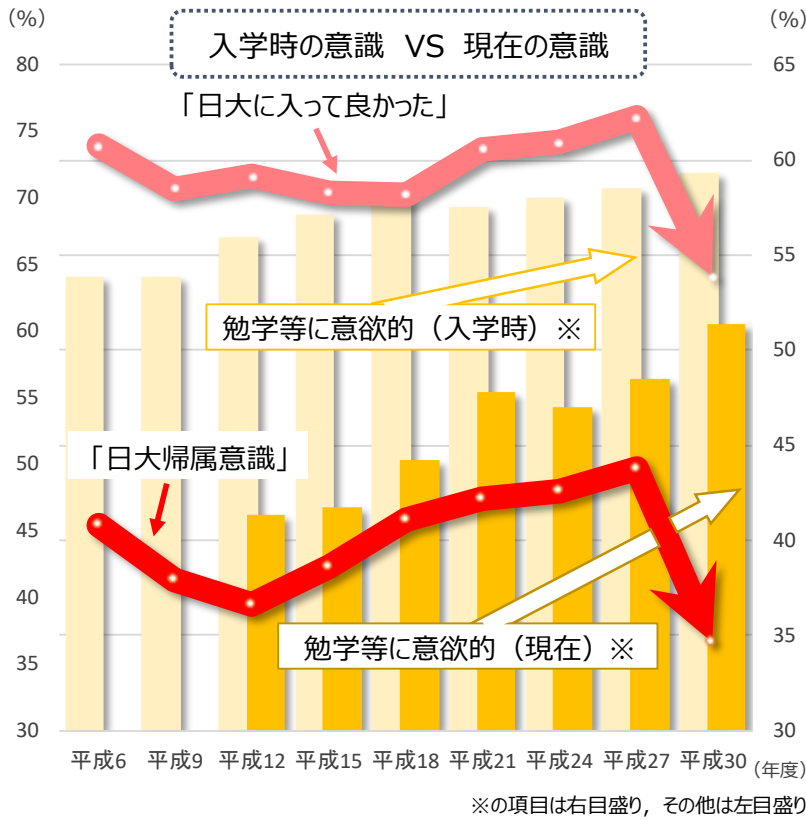
「日大の良さを認めるようになった」「日大生であることに誇りをもっている」「日大出身者は社会に出てから有利」「日大は今後益々評価される」「日大スポーツの活躍は誇りだ」といった日大生であることや日大スポーツに対する誇りやプライドが3年前より各10ポイント以上低下しています。特に低下の度合いが著しいのが文理学部で、同学部では学部帰属意識、日大スポーツについて「情報が欲しい」「見に行きたい」といった学部や日大スポーツに対する意識だけでなく、「将来の希望」「自分に自信」「良い影響を受ける教員」といった面でも大きな変化が見られます。

表7-7 現在の意識・行動の経年変化－3年前との比較（学部別）

	H30 年度	前回 差	白抜き ……10ポイント以上増加						黒字 ……10ポイント以上減少						<増減ポイント>	
			法	文理	経済	商	芸術	国際 関係	理工	生産 工	医	歯	松戸 歯	生物 資源		薬
日大の良さを認めるようになった	50.5%	-13.9	-19.8	-20.7	-15.7	-7.2	-17.4	-10.4	-11.4	-12.3	-5.0	-14.9	-6.1	-8.7	-15.9	-16.0
勉学意欲がもてるようになった	57.7%	1.5	-7.2	-7.8	6.3	6.4	-6.7					-5.6	9.7	9.4		
将来に希望がもてるようになった	44.8%	-0.4	-6.3	-10.0											5.0	6.1
自分に自信がついた	42.4%	1.4	-6.0	-11.3	14.1	6.4				6.3				7.6	-5.4	
人間性が豊かになった	60.6%	0.8		-9.9		9.9				10.7	-7.0					
着々と勉学の成果をあげている	44.4%	4.8	-6.3		10.1	9.9	10.1		7.1	9.2	7.3	17.5		6.8		
創造性が養われた	48.1%	2.2	-6.3	15.3	5.8	5.3				5.6	-5.1		6.8			
基礎学力の不足を痛感する	68.8%	-2.0	-9.0			-5.3						-7.7		-6.2		
必要な基礎学力を補習して欲しい	51.4%	0.2	-5.6		6.3	10.8				7.3	-5.1	-10.5	5.4	5.1		
目標をもって勉学している	53.0%	2.7	-8.7	11.2		9.2		5.6		7.2						
将来の職業希望がはっきりしている	50.4%	2.7	-9.8	5.1	7.5	14.0			7.9	11.3		5.0	5.3			
ぼんやりと過ごす時間が多い	61.0%	-0.9		9.6	-6.1						-7.8		-5.3			
良い影響を受ける教職員に出会えた	49.1%	-0.2	-5.0	-16.2	6.5	14.9							-6.7	7.3		
自分の学部に誇りをもっている	49.3%	-2.1	-11.3	-10.2	6.4	6.1		-5.0	-7.0	6.5			-6.6			
自分の学部出身者は社会に有利	49.7%	-3.1	-7.2	-12.5							-5.2	6.9	-11.0			
自分の学部は今後益々評価される	37.5%	-7.8	-14.6	-13.4	5.5	-10.9		-10.6	-8.8	-6.0	-16.8		-13.0	-5.4		
日大生であることに誇りをもっている	34.8%	-10.1	-13.2	-17.6	-6.7	-13.6	-14.6	-9.5	-14.0		-15.3		-11.8	-10.0	-11.7	
日大出身者は社会に有利	37.3%	-12.3	-10.7	-15.8	-5.8	-10.3	-14.4	-15.5	-13.9	-13.7	-11.9	-28.7	-14.5	-14.2	-12.0	-10.9
日大は今後益々評価される	23.8%	-16.1	-15.3	-19.6	-8.2	-18.5	-16.4	-15.9	-19.2	-20.7	-16.7	-19.8		-11.4	-16.7	-5.2
自分の身内を入れたい	21.6%	-3.4	-6.0	-9.0	-8.8						-14.0	-6.5				
自分の才能を伸ばしてくれる	39.5%	-3.1	-10.5	-12.6	8.0	-8.6					-11.7	-5.1				
日大スポーツの活躍は誇りだ	40.0%	-12.0	-10.0	-20.6	-11.4	-6.0	-13.3	-15.4	-8.4	-15.1	-6.7	-13.2	-12.9	-13.5	-14.5	-21.6
日大スポーツの応援に行った	22.7%	1.9	-6.1	14.6	-5.8	5.9					-5.1	-7.7	-12.9	8.2		
日大スポーツの情報欲しい	31.0%	-4.4	-9.7	-13.1	-11.4				-5.0		-5.1		-10.8	-7.6		
日大スポーツを見に行きたい	33.8%	-7.0	-10.9	-10.4	-6.0	-9.5	-7.8	-6.8	-9.1	-6.2	-10.4	-7.1	-15.0	-10.7	-5.5	
日本大学新聞を読んでいる	14.8%	-1.5		7.3	-10.5						-8.1					
学部の機関誌を読んでいる	15.7%	-1.6	-5.2		-9.5	7.2					-10.0			-8.6		
校歌の歌詞を見ないで歌える	19.4%	-1.2	-8.8	-7.5	7.7						-9.5	-7.9				
日大HPをよく見ている	27.3%	-4.0	-11.8	-7.5	7.4				-6.1		-13.5	-5.8	-7.6	-7.2		
学部のHPをよく見ている	61.4%	0.8		13.7	5.9			-6.0			-7.3	-6.3				
学部長名を知っている	42.4%	5.1	5.3	16.1	5.6	11.2	-8.3		5.8			6.5		-12.4		
学長（総長）名を知っている	53.6%	19.9	19.3	10.5	35.4	23.6	18.3	21.5	20.6	13.5	9.6	22.5	5.1	11.7	22.0	23.7
学祖名を知っている	57.0%	-1.3	-6.8		5.5	-9.8					10.6		6.6	-10.6	-10.7	

(注)学部別は、増減が5ポイント未満は非表示。

本学評価 と スポーツ日大

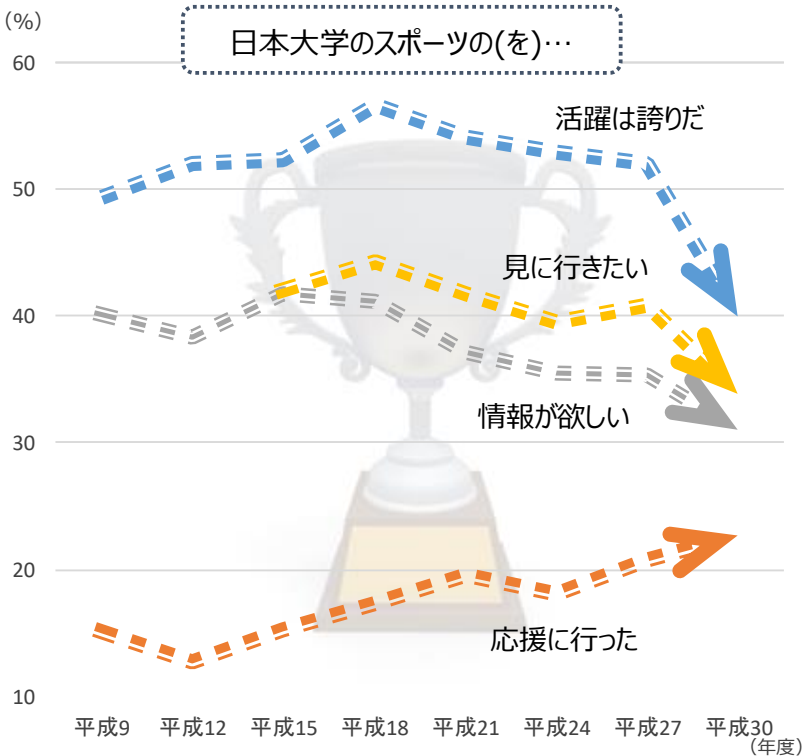


左のグラフ中の折れ線グラフは、「日大入学評価（日大に入って良かった）」と「日大帰属意識（日大生であることを誇りに思っている，等4項目の平均）」（調査時点：6月）を示したものです。「日大入学評価」は平成9年度以降、「日大帰属意識」は平成12年度以降高まる傾向にありましたが、平成30年度には、3年前より「入学評価」が11.9ポイント減、「帰属意識」が13.1ポイントも減るとい急激な変化が見られました。

一方、棒グラフを見ると、「入学時」勉学等に意欲的な学生の割合は年々増加しており、平成30年度は59.4%と過去最高でした。「現在」の意欲についてはより増加傾向が強く、平成30年度には51.4%と過去最高となりました。学生の意欲が入学後も保たれていることがわかります。学生たちの勉学意欲そのものは日大に対する評価とは関係なく増加しており、勉学に対する姿勢への影響はほとんどないと言えます。

下のグラフは、日本大学のスポーツに関する学生の「現在」の意識について示したものです。日大スポーツの「活躍は誇りだ」「見に行きたい」「情報が欲しい」はいずれも平成18年度から減少傾向にあり、平成30年度には大きく減少しています。しかし、「応援に行った」は増加傾向にあり、日大スポーツに関心のある層も確実に増加していることがわかります。

日大スポーツの「活躍は誇りだ」とする学生は平成27年度より12ポイントも減少したとはいえ、日大スポーツを「見に行きたい」学生が平成27年度には微増したこと、スポーツ応援に出向く層が増加していることなどの明るい傾向も見えています。



※勉学等に意欲的に関して、（入学時）の項目：「入学時に卒業後の進路等を意識」「多くの授業に出て好成績をとる」の2項目の%の平均値。（現在）の項目：「勉学意欲がもてるようになった」「着々と勉学の成果をあげていると思う」「目標を持って勉学している」「将来の職業希望がはっきりしている」の4項目の%の平均値

※大学への評価・意識に関して、（入学時）の項目：「日大に入って良かった」の%。（現在）の項目：「日大の良さを認めるようになった」、

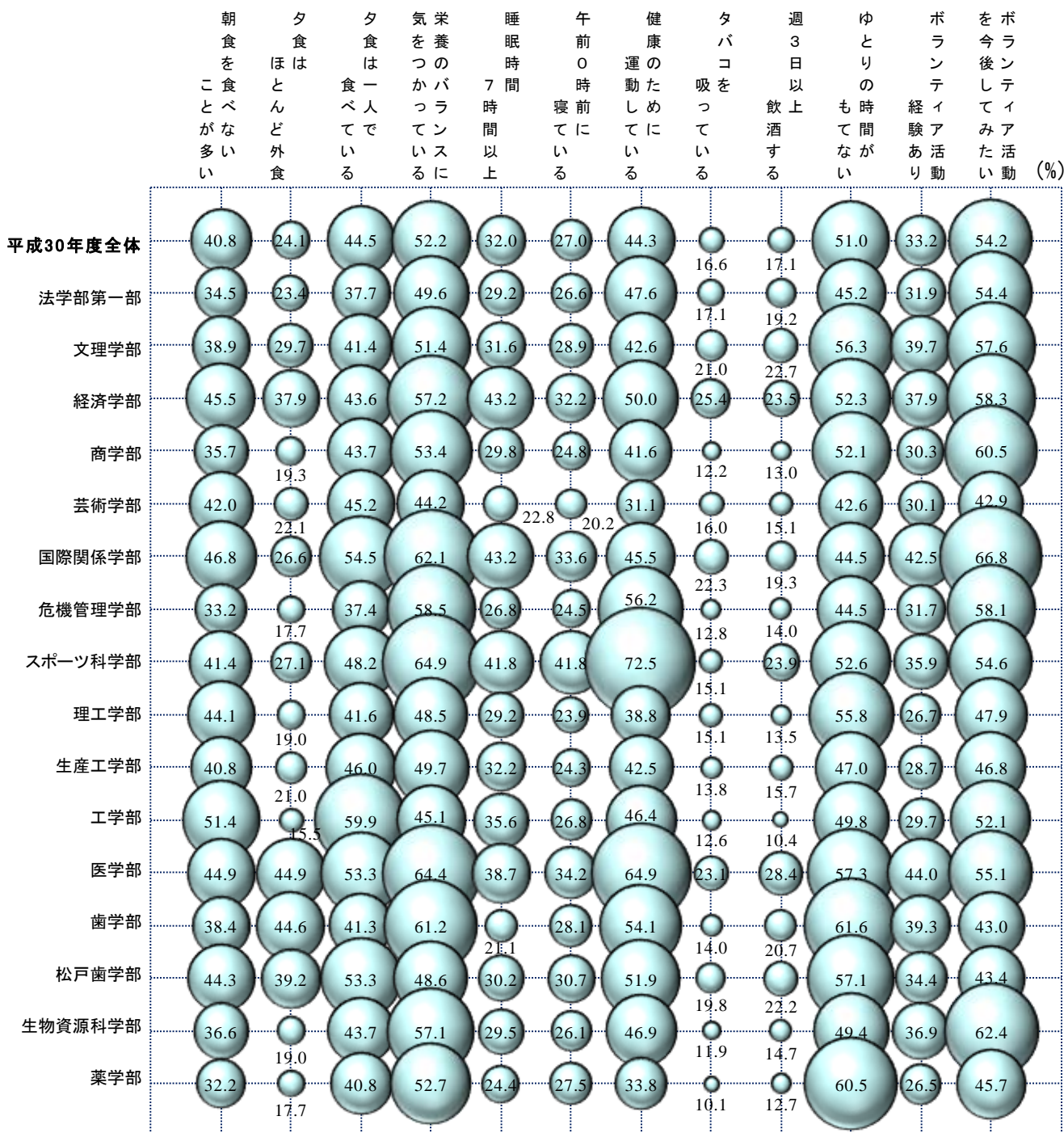
「日大生であることに誇りを持っている」、日大出身者は「社会に有利」、日大出身者は「今後ますます評価される」の4項目の%の平均値。

8.日常生活及び個人活動

栄養のバランスを考えた食事，健康のための運動等健康に留意している学生はほぼ半数。
勉学等で「ゆとりの時間がもてない」学生が半数。

全体で見ると，食事に関して「栄養のバランスに気をつけている」が半数強（52.2%），「健康のために運動している」は半数弱（44.3%）となっており，学生のほぼ半数は食事や運動によって健康面に留意しているようです。一方で，「朝食を食べないことが多い」が4割（40.8%），また「睡眠時間7時間以上」と「午前0時前に寝ている」は30%前後にとどまっています。「授業のための勉学やレポート作成などのために『ゆとりの時間がもてない』」もほぼ半数（51.0%）となっていますので，勉学に忙しい学生生活を送っている学生が多いようです。また，「ボランティア活動を今後してみたい」学生は54.2%，国際関係学部・生物資源科学部・商学部で高くなっています。

図7-8 日常生活及び個人活動(平成30年度全体・学部別)



9.日常生活及び個人活動の経年変化—その1

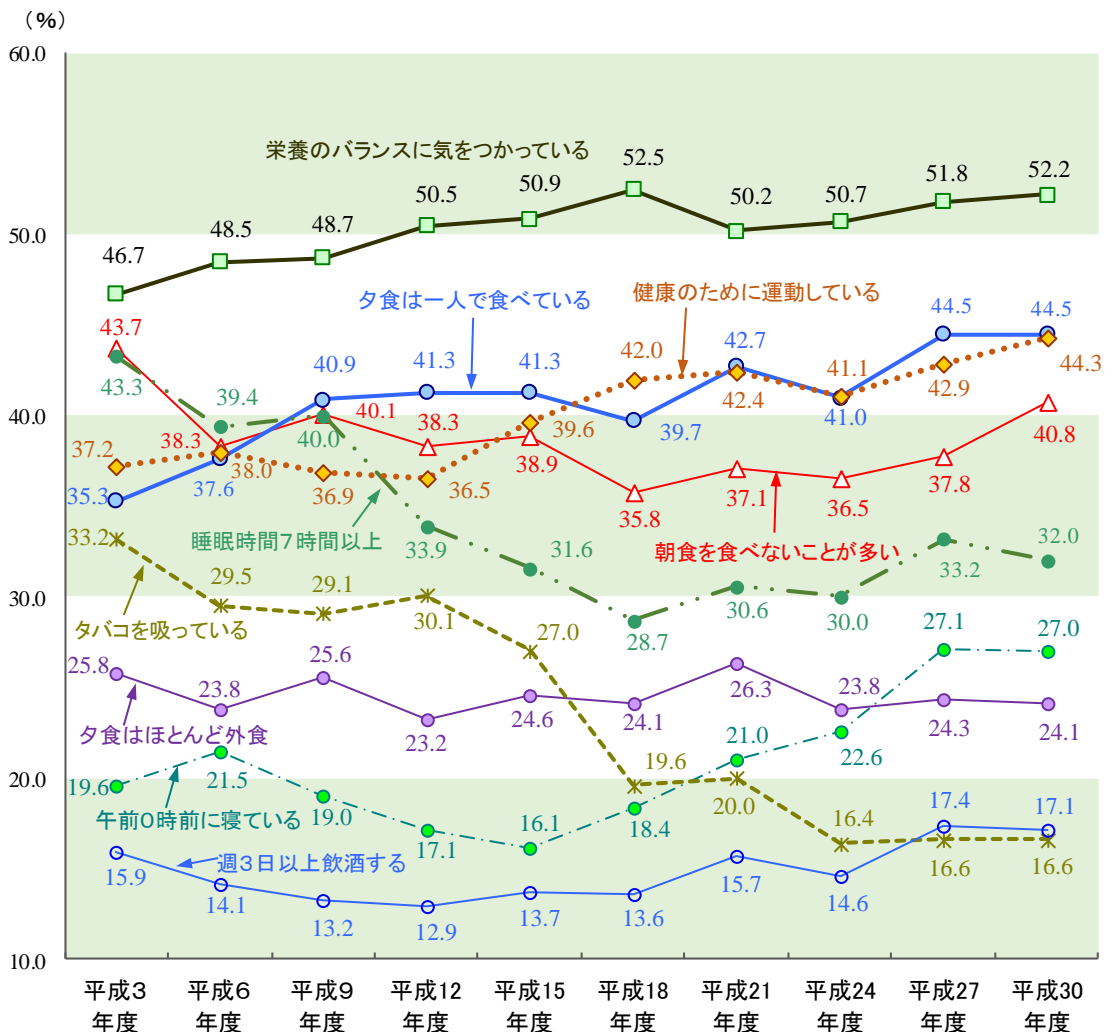
健康管理にアドバイスの余地あるものの、栄養・運動面で健康志向が徐々に向上、近年睡眠も改善方向。タバコ離れの一服、飲酒の漸増は継続。

学生の日常生活及び個人活動について平成3年度からの経年変化を見ると、「栄養のバランスに気をつけている」は27年間で5.5ポイント増、「健康のために運動している」も同期間に7.1ポイント増となっていますが、一方で「朝食を食べないことが多い」は平成18年度から増加傾向に転じ、12年間で5.0ポイント増の40.8%（平成30年度）となっていますので、長いレンジで見ると健康管理についての態度は概ね向上しているようですが、まだまだアドバイスの余地はありそうです。

睡眠についての変化を見ると、「睡眠時間7時間以上」が平成3年度の43.3%から平成18年度までの15年間に14.6ポイント減少しましたが、その後上昇傾向となり平成30年度は32.0%となっています。「午前0時前に寝ている」も直近の15年間に10.9ポイント増加しており、学生の睡眠改善方向にあるようです。

また、「タバコを吸っている」は平成24年度までの21年間で16.8ポイント減、この6年間は横這い、「週3日以上飲酒する」は平成12年から漸増傾向で18年間で4.2ポイント増となっています。

図7-9-1 日常生活及び個人活動の経年変化(全体)—その1



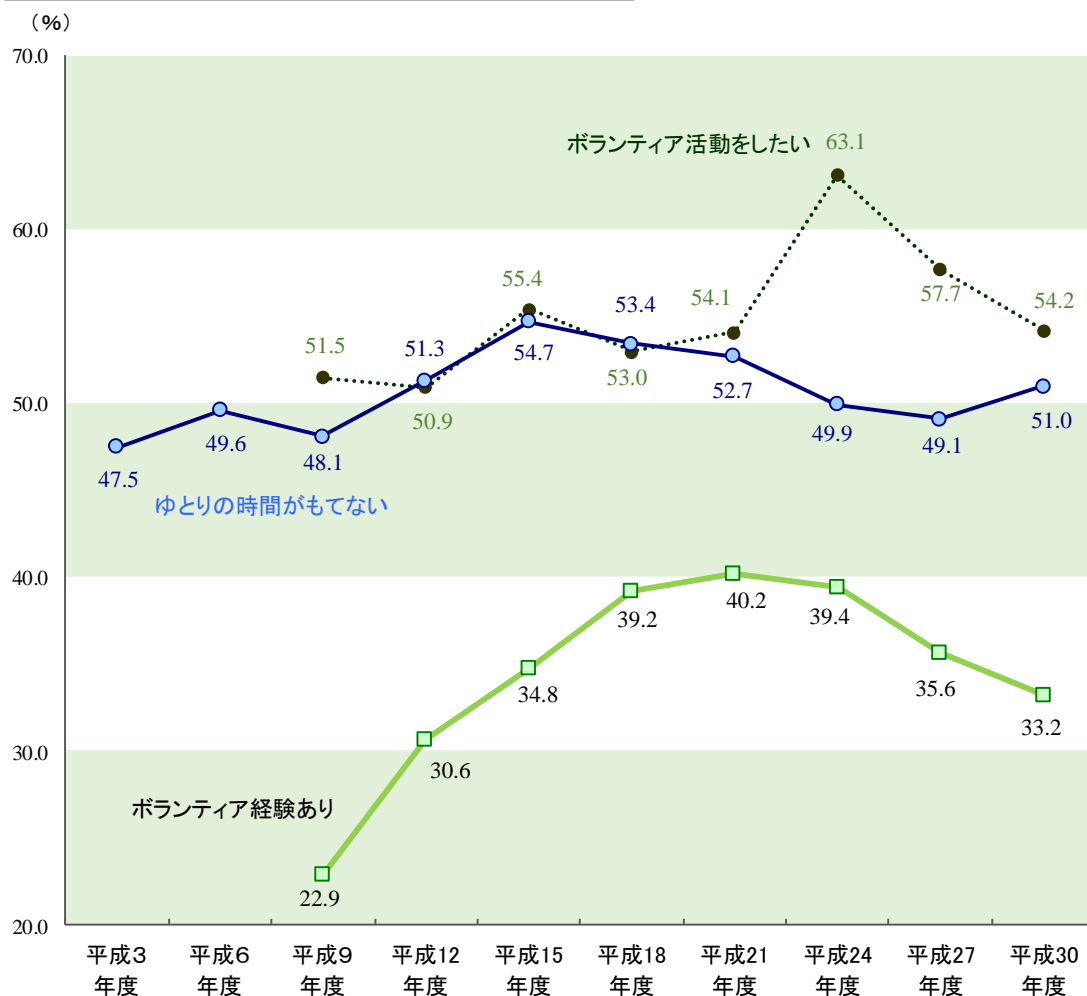
9. 日常生活及び個人活動の経年変化—その2

ゆとりの時間がもてない学生の減少傾向が、本学学生全体では休止，学部によっては継続。
生産工学部でゆとり改善が顕著。授業についての取り組みの効果か。
ボランティア熱は下降ぎみ。

ゆとりについての経年変化を見ると、「授業のための勉強やレポート作成などのために『ゆとりの時間がもてない』」学生が平成3年度から平成15年度の12年間で47.5%から54.7%と7.2ポイント増加し、平成27年度は49.1%と、平成15年度からの12年間で5.6ポイント減少していましたが、平成30年度は再び増加に転じて51.0%と3年前より0.9ポイント増加しています。

学部別に見ると、「ゆとりの時間がもてない」学生は、平成15年度から15年間に、生産工学部で21.4ポイント減、工学部・歯学部・松戸歯学部で10ポイント以上減少しています。例えば、生産工学部では平成15年度から学生に対して『授業評価アンケート』を実施し、教員が教育効果を勘案し授業改善に取り組んでいます。他の学部でも同様の取り組みを通して授業方法の改善等の取り組みがなされた結果、学生のゆとりが改善されてきていると推測できます。平成7年1月17日の阪神淡路大震災を機にボランティア活動が国民に広く浸透してきたようですが、平成9年度に「ボランティア活動をしたい」とした学生は51.5%でした。その後漸増傾向を示し、東日本大震災（平成23年3月11日）直後には63.1%に達しました。その3年後である平成27年度は5.4ポイント減少、平成30年度はさらに3.5ポイント減少し54.2%、となっています。ボランティア活動の経験率は、平成9年度の22.9%から平成21年度の40.2%まで上昇し、その後九州地方で熊本地震（平成28年4月14日）、その他の地方でも災害が多く発生しましたが、減少傾向となりました。ボランティアを行動に移すのは学生にとっても容易ではなさそうです。

図7-9-2 日常生活及び個人活動の経年変化(全体)—その2

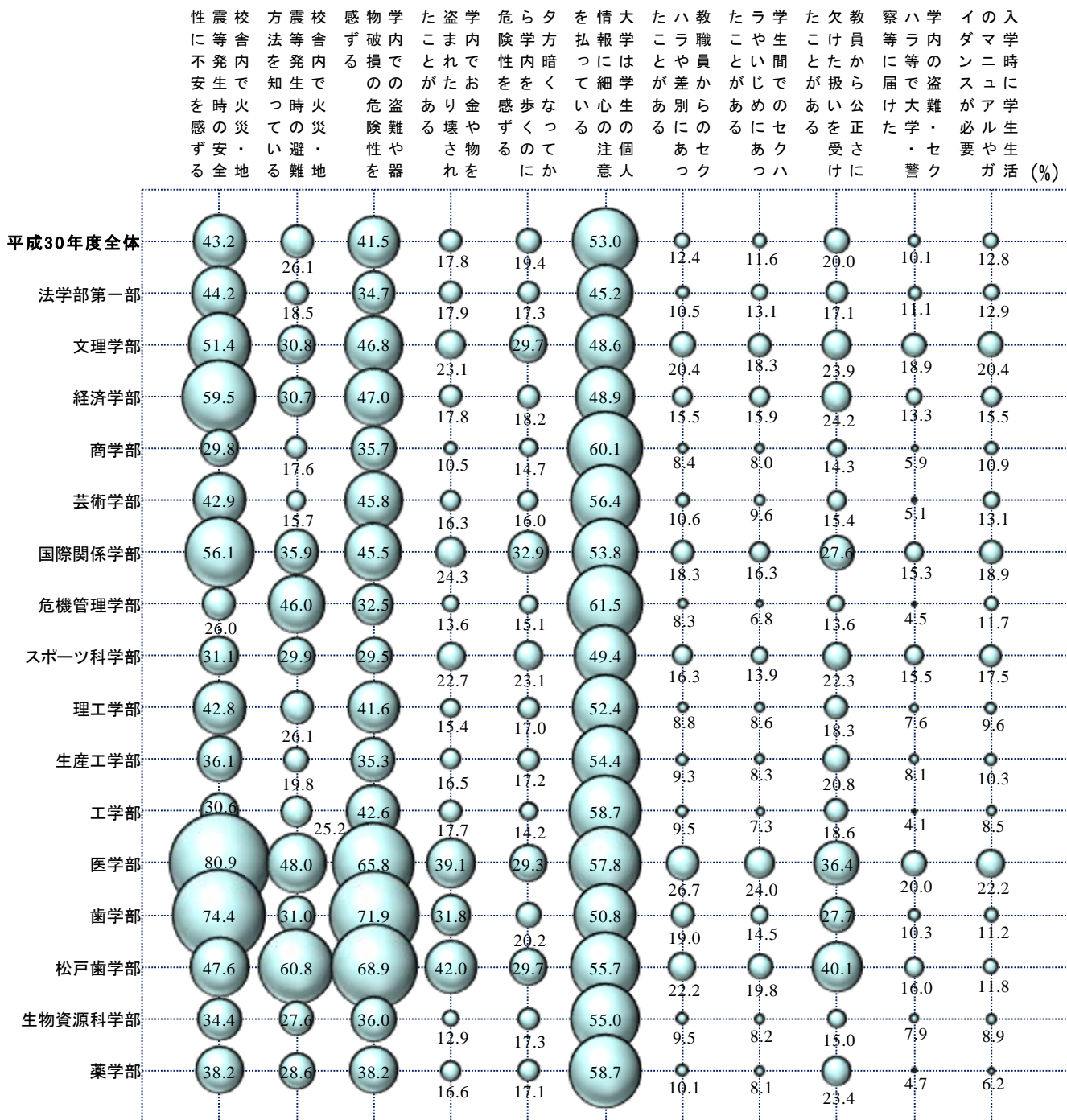


10.安心できる大学環境

本学の個人情報保護に対し、53.0%の学生が評価。
「災害時の安全性に不安」の43.2%に対し「避難方法を認知」は26.1%。学部間の差が大。

平成30年度全体で見ると、大企業・官公庁・大学からの個人情報漏洩が相次ぐ中、「大学は学生の個人情報に細心の注意を払っている」とする学生が53.0%と高くなっています。安全面では、「校舎内で火災・地震等が発生した時の安全性に不安を感じる」学生が43.2%いる一方、「避難方法を知っている」学生は26.1%にとどまっています。災害時の安全については学部間のバラつきが大きく、学部ごとの対応の必要性を示しているようです。「学内での盗難や器物破損の危険性を感じる」は全体で41.5%、医歯系学部で高くなっています。

図7-10 安心できる大学環境(平成30年度全体・学部別)



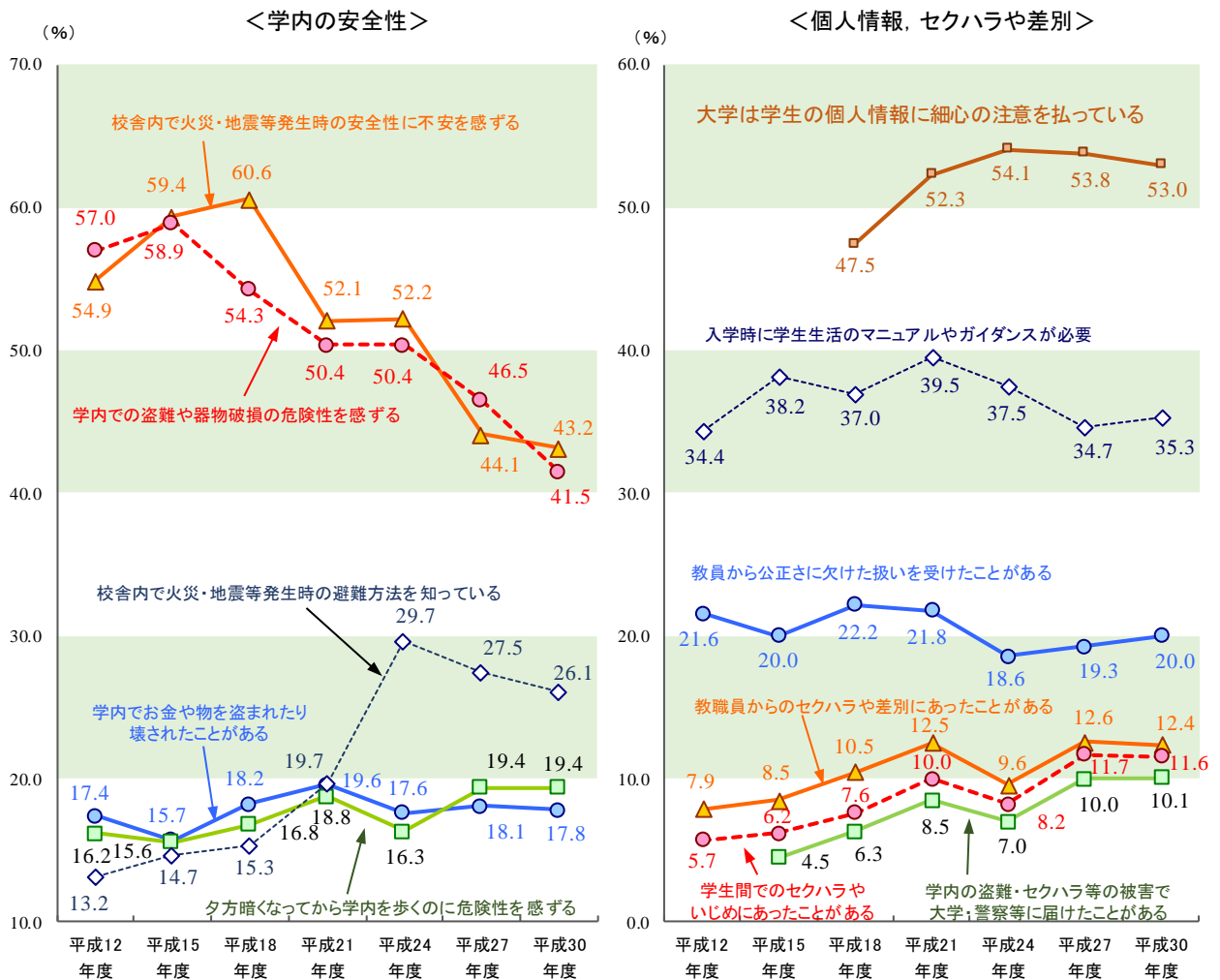
11.安心できる大学環境の経年変化

校舎内での災害時の安全性に不安を感じる学生が大幅減。盗難等の危険性も減。
多数の学部での校舎新設・耐震工事の進捗による効果！
個人情報管理体制についての学生意識も要傾聴。

学内の安全性について、この項目が調査に含まれた平成12年度からの経年変化を見ると、「校舎内で火災・地震等発生時の安全性に不安を感じる」学生は平成18年度の60.6%から平成30年度の43.2%まで12年間に17.4ポイントも減少しました。学部ごとに直近の12年間の変化を見ると、医学部を除く13学部で減少、商学部では43.1ポイントの大幅減、薬学部・法学部第一部・生物資源科学部・芸術学部では20ポイント以上減となっており、多数の学部で校舎の新設や耐震工事がと進んでいる成果が表れているようです。また、「学内での盗難や器物損壊の危険性を感じる」学生も平成15年度の58.9%から15年間で17.4ポイント減少して41.5%になっています。校舎など学内整備は学生の安全面にも寄与していることがうかがえます。一方、「避難方法を知っている」学生は直近の6年間で3.6ポイント減少しており、学生に対する危機管理体制強化の継続が期待されます。

個人情報について見ると、「大学は学生の個人情報に細心の注意を払っている」は平成18年度の47.5%から平成24年度の54.1%まで年々増加していましたが、平成27年度以降緩やかに減少しています。これは前回の調査でも見られた点ですが、個人情報の流出などが社会問題となる昨今、情報管理体制と学生への告知について考えさせられるデータと言えるかもしれません。

図7-11 安心できる大学環境の経年変化(全体)

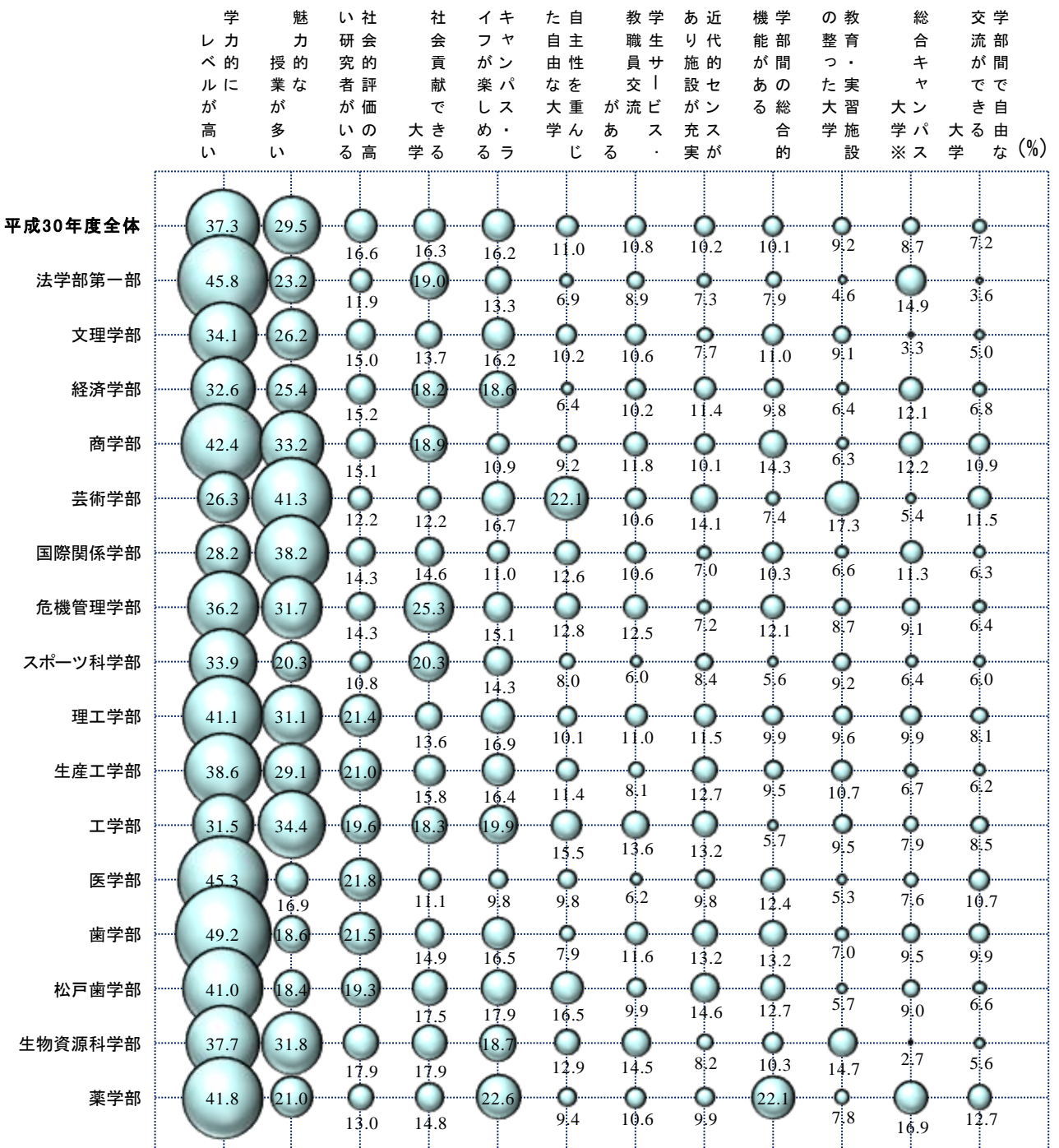


12.望まれる大学づくり

魅力ある誇れる大学にするためには「学力レベルの高さ」と「魅力的な授業の多さ」が重要。
『勉学面のレベルアップ』に加え、『社会評価・社会貢献』を重視。

日大を魅力ある誇れる大学にするために特に重要な政策についての学生の回答を平成30年度全体で見ると、「学力的にレベルが高い」(37.3%)と「魅力的な授業が多い」(29.5%)が高くなっています。「社会的評価の高い研究者がいる」「社会貢献ができる」「キャンパス・ライフが楽しめる」は16%台、「自主性を重んじた自由な大学」が11.0%で続いています。本学の規模を生かした「学部間の総合的機能」「総合キャンパス」「学部間交流」は10%以下となっており、『勉学面のレベルアップ』や『社会に評価されること』がより重要だと考える学生が多いことがわかります。

図7-12 望まれる大学づくり(平成30年度全体・学部別)



※「1つのキャンパスに全学部が入った大学」

13.望まれる大学づくりの経年変化

魅力ある誇れる大学にするために『学業面』でのレベルアップが重要とするマインドが激減。
『自主創造』の教育理念に通じる『自主性』の価値に気付き？

日大をより魅力ある誇れる大学にするために特に重要な政策についての学生の回答を平成6年度から経年変化で見ると、「学力的にレベルが高い」は年々大幅増加していましたが、平成24年度をピークに減少に転じています。「魅力的な授業が多い」は平成12年度から漸減傾向が続いており、直近の3年間で8.7ポイントも減少しています。「キャンパス・ライフが楽しめる」と「総合キャンパス大学」は平成9年度から概ね漸減傾向にあります。

平成19年、現在の社会状況に即応しかつ本学の総合性を発揮することを目的として、本学の教育の理念と目的が『自主創造』とされました。「学生の自主性を重んじる」という回答は平成6年度の17.6%から平成27年度の7.9%まで21年間で9.7ポイント減少し、本学と学生の重視点の乖離傾向は継続していましたが、他の項目が軒並み減少傾向にある中、平成30年度は3年前より3.1ポイント増加しており、本学学生の意識の変化が読み取れる結果となっています（文理学部の1.7ポイント増から松戸歯学部5.3ポイント増、生物資源科学部の6.2ポイント増まで全学部で3年前より増加）。魅力のある誇れる大学として『学業』面での強化を図るといったマインドが激減し、『自主性』つまり学生個人の意思の重要性に学生自身が気付いたかのような調査結果となっています。

図7-13 望まれる大学づくり — 主なものの経年変化(全体)

